

氏名(国籍)	楊 平 (中国)		
学位の種類	博士(社会学)		
学位記番号	博甲第4541号		
学位授与年月日	平成20年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	中国・太湖湖岸環境の利用と保全に関する環境社会学的研究		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	好井裕明
副査	筑波大学教授	博士(社会学)	菱山謙二
副査	筑波大学教授	博士(社会学)	黄順姫
副査	早稲田大学教授	文学博士	鳥越皓之

### 論文の内容の要旨

本論文は中国・太湖の環境問題を考察するものである。そのなかでも太湖周辺に住む人々と、特に太湖に住む家船生活者の視点からみた生活空間に焦点をおき、太湖湖岸の環境の利用と保全の取り組みを分析する。太湖の環境保全問題の解決にむけて当該地域の住民生活を視野にいれる必要がある。そこで、太湖に住む家船生活者からみた湖との関わりかた、湖の変容とともに、いかなる保全をしていくことによって、「住める空間・暮らせる環境」が維持されるのかに分析の軸を置く。

中国・太湖では古来より、さまざまな規模の異なる「家船生活者」が多く暮らしてきた。漁業を中心として暮らしてきた「家船生活者」にとっては、船あるいは舟が交通手段であるだけでなく、居住の場所でもある。「家船生活者」が「湖と一生を暮らす」と語るように、湖そのものが一生涯においての生活の場となっていた。このように太湖では生涯を湖の上で生活し、湖とつき合う「家船生活者」同士による、ある種の特有な「湖上のコミュニティ」が形成されていたのである。

そこで、本論文では生涯湖上で暮らしてきた「家船生活者」がどのように湖の自然や環境とかわって来たのかという視点から考察を行っている。太湖湖岸の村落や集落を事例地として、湖岸域の水利用、水辺空間利用の問題を中心に実際の住民対応について、それぞれの地域の具体例を検討する。それぞれの章では、古くから太湖で暮らしてきた「家船生活」「家船生活者」(「連家船漁民」(LianJiaChuanYuMin))と湖岸住民による湖岸の利用に関する事例を取り上げ、「家船生活」をつうじた太湖湖岸の環境の利用と保全の実態を明らかにし、環境保全のありかたについて分析を行っている。

本論文では、日本の環境社会学における研究の成果を参照しながら、住民分析の手法をもちいて、中国の湖沼が抱える固有の環境問題を分析している。水質汚染の問題が深刻化する太湖(浙江省、江蘇省)周辺の農村や集落を主なフィールドとし、伝統的な環境の利用に注目し、「家船生活者」や湖辺住民による家から集落までの広がりをもった環境の利用実態を把握する。

第1章では、本論文の方法論にかかわる諸問題を検討する。なぜ居住者の視点から中国・太湖の環境問題を取り扱うのかについて概説し、自然や空間の利用と管理に関する諸研究史を踏まえた上で、本稿の立場はどのようなものであり、どのような分析視角を採用し、そのことはどのような意義があると考えられるのか

について明確にする。第2章では水利用の仕組みに関する記述から、今日の太湖の水利用の実態を明らかにする。そして第3章、第4章、第5章、第6章を通して、湖岸の環境利用の実態と管理のありかたについて検討を加える。第2章から第6章までは、中国・太湖地域における事例の分析である。

第2章は、中国・太湖における湖岸住民の生活環境史の記述を目的とした論考である。それは、「湖の水質汚染」という環境問題を考える際には、湖岸住民の湖（湖水面だけでなく湖岸も含めて）の利用方法をおさえる必要があるからである。太湖においてもいわゆる「近代化の危機」が進行中である。この太湖の湖岸の一部を占める無錫地域において、湖の水質の汚染に対し、湖岸住民はどのような対応をしているのか、家船を持つ漁民による水利用の実態を取り上げて検討を加える。さらに、近代化や観光化が進む現代中国の太湖において、湖と生活してきた人たちの生活文化という視点を加え、その存続が環境政策に大きな示唆をもっていることを示す。

第3章は、太湖湖岸で、地元住民がどのような共同利用をつうじて湖岸の空間管理をしてきたかということについて考察する。具体的には水辺空間における重層的所有における相互利用的管理について検討する。湖岸のヨシハラの利用がなされる空間の秩序を「管理的代償ルール」と「容認的占有ルール」という分析視角から明らかにし、中国・太湖ではどのような自然管理のありかたが望ましいかということについて、今後の環境政策に対し有効と思われるひとつの具体案を提示していく。

第4章では、古くから太湖に存在してきた家船で暮らす漁民を取り上げ、「家船観光」をつうじた文化や環境保全の実態を分析する。そして、観光客を呼び寄せる活動をメインの目的として家船生活を続けることを選択した「漁家楽の会」の活動と、昔ながらの漁業を生業としつづけることを選択した「家船生活者」の暮らしに着目する。さらに、漁民による「観光経験」の事例を通じて、現在の太湖において「漁民が主体となる地域観光」がどのようなものであるかを明らかにする。また、太湖の漁民による観光への対応が今後どうあるべきかということについても考察していく。

第5章は、中国・太湖における漁村の地域空間の利用状況を分析し、そこに「複合利用戦略」と呼ぶ戦略がみられたことを指摘する。事例として、太湖の漁村で漁民を主体に立ちあげられたある事業をとりあげる。漁民たちは開発後の地域生活再生のために事業を立ちあげ、その事業をつうじて共同利用できる空間の拡大という戦略をとった。それがどのようなものであったかを、事業の経過プロセスやこの地域の社会的要因などを踏まえて考察し、彼らにとっての「暮らしやすさ」に妥協することなく、結果的にのぞましい湖岸環境の保全を行っていた彼らの地域空間の利用戦略を明らかにしていく。

第6章では、「古樹・名木」の共有の観点から、太湖沿岸地大浮郷の事例を参照しながら自然環境保全のありかたについて検討を加えていく。事例地である沿岸地域に住む地元「沿岸住民」と「家船生活者」らによる「古樹・名木」の保全の内実を明らかにし、その地域における自然環境保全の課題について検討する。

終章では、5つの事例研究の考察をつうじて得られた知見をまとめ、環境社会学における環境利用論、環境保全などにおいて本論文がどのような位置にあるのか、そして、そのような立場をとることは、今後の環境政策を考えていく上でどのような意義があるのかを示した。

本論文は、日本の環境社会学が蓄積してきた研究や知見をもとに、実際に太湖地域の現場の人々がかかえている問題に焦点をあてる。そして、そうして得られた知見から問題解決を志向する立場で環境保全を検討するという方法で論を進めていく。その上で、近年、さまざまな形で環境保全への取り組みが進められるなかで、その具体的な事例を検討しながら、地域環境の保全のありかたを導くことを試みたものである。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、中国にある太湖をフィールドとして、特に湖で生活をたててきた「家船生活者」や漁民の生活

を詳細にフィールドワークする作業を通して、彼らが保持している環境を保全していこうとする実践やそこに活きている規範を解説しようとする。湖畔集落における水利用の在り方や湖畔に群生するヨシの利用の仕方など、具体的な人々の生活実践がもつ意味を丹念に取り出そうとする姿勢は評価できる。著者が依拠するのは日本において創造された環境社会学のパラダイムであり、特に生活環境主義という見方である。他にもコモンズ論などの先行研究の検討があり、こうした見方が中国の環境問題さらには環境政策に適用可能であることを例証している点でも評価できる。ただ、問題点を述べれば、太湖地域は広大なものであり、今回の論文では湖畔生活者そして湖上生活者の生活の検討に限定されており、よりマクロな視点での環境問題や環境政策への志向が必要となろう。ただこうしたマクロな視点からの環境政策提言も中国という国情を考えると、日本のケースをそのまま適用することはできず、著者自身が今後研究を展開していくうえでの重要な課題といえ、本論文はその課題へ向けた着実な成果としては十分評価できるものである。

よって、著者は博士（社会学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。